

## 平成30年度 入学式

### 式辞

本日ここに、多数のご来賓の皆様ならびに関係各位のご臨席のもと、平成30年度東京理科大学入学式を挙げるにあたり、学長として、ご挨拶申し上げます。

新入生の皆さん、大学院に進学された皆さん、ご入学、ご進学おめでとうございませう。実り豊かな学生生活を送られることを心より願っています。また、学生の皆さんを今日まで支えてこられたご家族の方々にも、心からお慶び申し上げます。

東京理科大学は、137年前、明治14年に設立された「東京物理学講習所」をその起源にしています。明治10年に創設されたばかりの東京大学理学部物理学科の卒業生を中心とした21人の若い理学士らによって作られました。

明治初期の自由民権運動を時代背景として、フランス人教師から教育を受けた市民的エリートであった彼らにより「理学の普及を以て国運発展の基礎とする」という建学の精神のもと、設立されたのです。

明治16年に「東京物理学校」に改称され、多くの困難を克服しながら、自律的精神の下、官立でもなく、ある傑出した人物によってでもなく、民主的に「同盟」を結んだ若き理学士たちによって、維持、運営されてきました。これは東京理科大学を特徴づける重要な原点になっています。

我が国が近代化を成し遂げた明治から大正にかけて、当時の師範学校と中等学校の数学、物理学、化学の教員の半数以上を東京物理学校の卒業生が占めていました。このことは、建学の精神「理学の普及」を体現したものとと言えます。

設立にかかわった若き理学士たちは、科学への気概に満ち、情熱に溢れた教育者でした。その志は東京物理学校で学ぶ学生たちにも共有され、真に実力を身に付けた者のみが卒業していました。当時から「実力主義」の学校として定評があったのです。東京理科大学となった今日でも、その伝統は脈々と受け継がれています。

昭和24年に行われた学制改革によって、東京物理学校は、新制大学として、東京理科大学となりました。理学部に加えて、薬学部、工学部、理工学部、基礎工学部、経営学部が新設され、また、大学院研究科も順次整備されました。今日では学部は7学部31学科、大学院は7研究科30専攻を有する、我が国屈指の理工系総合大学として発展しています。

東京理科大学となってから、既に20万人以上の有為な人材を社会に輩出してきま

した。卒業生は、東京物理学校以来の伝統を受け継ぎ、全国の高等学校などで優れた理数系教員として教鞭をとっているほか、技術者、研究者として日本はもとより、世界で活躍しています。

本日、皆さんは、輝かしい本学の歴史を受け継ぐ主役となりました。ぜひとも、悔いのない有意義な大学生活を送って欲しいと思います。

ここで私の自己紹介をさせて下さい。実は、私も今年度から学長に就任した一年生です。皆さんと一緒に入学出来て、大変嬉しく思っています。

さて、時代も違い、今とは比較にならないと思いますが、私が大学に入学した当時のことを思い出してみましょ。昭和43年のことです。当時は、学生運動が盛んで、入学後しばらくして無期限ストに突入するという、学生にとっても教員にとっても激動の時代でした。大学とは何か、学問とは何か、考えざるを得ない状況におかれた訳です。講義の行われな教室に集ってクラスの友人たちと議論をしました。そうした中で多くの書物も読みました。やがて大学は正常に復し、再び勉学に取り組むことになりましたが、そうした経験は自らをより強い存在に押し上げてくれたように思います。当時の悩みや議論は、長い人生において無駄ではなかった、むしろ得るものが多かったと思います。是非、若い感性豊かな時代に、じっくりと考える習慣を身に付けて下さい。

今我々が生きている時代は、複雑に状況が交錯し、多くの課題が山積しています。そうした課題には、既に決まった解決方法がある訳ではありません。様々な観点から考え抜いて、答えのない課題を処理して行くことが求められています。

大学院に進学した当時のことも思い出してみましょ。進学後しばらくして、ある先輩の学生から、「大学院生だって一生懸命勉強すれば、狭い分野の研究かもしれないけれど、その一点では指導教員に負けない成果をあげられる。頑張ろう。」と言われたのを鮮烈に覚えています。その当時から学問領域の専門化が進み、指導教員といえども全てを把握し切れなくなっていたということだったのかも知れませんが、私は単純に「僕だって」という気になって、勉学、研究に励んだものでした。

私の専門は機械工学でしたが、学会などで、その分野の第一人者から最新の知識を獲得するのは楽しいものでした。自ら企画した研究によって見出した知見、現象、それらを解析し、合理的な説明が出来た喜びは何物にも変え難いものでした。好奇心が満たされた時には、喜びを感じ、楽しいと思うものです。特に、長い試行錯誤を経て、考えに考えた後の「分かった」は快感でしょう。分野の最先端に立って研究を行う楽しさは何物にも変え難いと思います。別物だと思っていたものが、統一的に理解

されたとすると、それは更なる快感でしょう。

経験を積み、その分野の知識が増えてくれば、研究は益々面白いものになります。何も研究に限った事ではありません。これから始まる大学における「学び」においても、全く同じことがいえます。是非皆さんにはこの「分かる、楽しい、面白い」を学問の場において体験してもらいたいと思います。

研究であれ、学びであれ、この快感を得るには、その分野の基礎を大事にし、何かの時には立ち戻れるものを持って、じっくりと検討する習慣を身につけることが重要です。深く学び、深く研究したことによって獲得した知識、手法は様々なことに応用が利くものです。是非、学問の深みに身を沈めて下さい。学ぶことを楽しんで下さい。

しかし、いつも順調に研究や学びが、進むとは限りません。数多くの失敗もして下さい。「失敗学」という言葉を聞いた人もいるでしょう。東京大学名誉教授の畑村洋太郎先生が提唱されたものですが、失敗を隠さずその原因と結果を調べることにより、同様の失敗を未然に防ごうというものです。失敗の体験から、知識・経験・思考が体に染み付いたものとなり、血となり肉となって、真の科学的理解を生むことになるのです。失敗を恐れず、謙虚に認め、真実を見極め、誠実に学問を追究して下さい。

着実に理解を進め、知識を積み上げることも大切ですが、様々な観点から、少し離れて、研究や学びを見つめ直し、何が真に重要かを理解しておくことは、それにもまして大切です。

歴史的見地から学術の発展を考えてみると、人類は今までに、様々な活動によって得た断片的な知見を集め、その分野の知識としてきました。分野を限定して知識を深め、蓄積することは、人類の発展には必須で、今後必要です。

その反面、知識の際限のない細分化、複雑化は、科学技術の専門家にとってすら、専門領域外との連携が困難な状況を生んでいます。このことは、地球環境問題の深刻化、技術の複雑化による事故などを引き起こしており、社会的問題の解決を困難にしています。こうした状況を打ち破るには、これまでに構築された専門的知識をつなぎ、大きな目標に向かって協調して行ける仕組みを作ることが重要です。

現在、学術と生活あるいは社会、つまり学術と人々との距離が遠くなっています。社会から学術への無条件の寛容さが無くなり、大学への目には厳しいものがあると思われれます。このような状況は、本来社会の公器である大学が社会に対して説明責任を果たすことを困難にしています。しかし、それが現状なので、私たち自身が、その解決に責任を持つべきです。

大学は自律した個人の集団です。研究者は、主体的、自律的判断に基づいて、確信

を持って行動しています。この自律性が学術の発展には不可欠であることを、歴史の教訓から学んでいます。しかし、各専門分野に安住してしまえば大きな力にはなりません。我々が直面する様々な課題を解決することはできません。大学という多様な組織体は、自律分散しているだけでなく、協調して活動できる仕組みを持つ必要があります。そうした活動を有効にするのは、明確な目標の設定であり、それを支える広い意味の教養です。

本学では今年度から、全学的に学生、教員が一体となって教養教育を推進する仕組みを立ち上げました。こうした協調のための最も効果的な方法は、人々が交流することです。分野を超えて理解し合い、教養を高め合う努力をして下さい。他の分野のセミナーに出席したり、分野の異なる先生方と議論をしたり、様々な努力が可能でしょう。分野を越えた協調は、教員よりも、むしろ、若く柔軟なあなた方のほうがやり易いと思います。友達をたくさん作って下さい。大学を、そして社会を取り巻く困難な状況を打破してくれることを望みます。

皆さんが自ら選択した学問領域を深く掘り下げて下さい。「分かる、楽しい、面白い」を実感して下さい。研究と学びの輝かしい成果を期待しています。本学が提供する「充実した教養教育」を享受して下さい。最先端の専門知と幅広い教養とを併せ持った、知のフロントランナーとなって欲しいと思います。

本日は多くのご家族の皆様、関係の方々にもご臨席賜っております。東京理科大学に入学、進学した皆さんは、本日、私達教職員とともに、未来に向けて出発しました。暖かく見守って頂きますようお願い申し上げまして、私の式辞と致します。

平成30年4月9日

東京理科大学 学長 松本洋一郎